

法の一分也。云にかひ無き仏教の小乘阿含經にも（及ばず）、況や通・別・円をや。況や法華經に及べしや。かゝる淺事だにも成ぜんとすれば四魔競て成じがたし。何況法華經の極理南無妙法蓮華經の七字を、始て持たん日本國の弘通の始ならん人の、弟子檀那とならん人人の大難の來らん事をば、言をもて尽し難し。心をもてをしはかるべしや。

されば天台大師の摩訶止觀と申文は天台一期の大事、一代聖教の肝心ぞかし。仏法漢土に渡て五百余年、南北の十師、智は日月に齊く、徳は四海に響きしかども、いまだ一代聖教の淺深・勝劣・前後・次第には迷惑してこそ候しが、智者大師再び仏教をあきらめさせ給のみならず、妙法蓮華經の五字の藏の中より一念三千の如意宝珠を取出して、三国の一切衆生に普く与へ給へり。此法門は漢土に始るのみならず、月氏の論師までも明し給はぬ事也。然れば章安大師釈云、（「止觀の明靜なる前代に未だ聞かず」）云云。又云（「天竺の大論尚其の類に非ず」）等云云。其上摩訶止觀の第五卷の一念三千は、今一重立入たる法門ぞかし。此法門を申には必魔出來すべし。魔競はずば正法と知るべからず。第五卷云、（「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る、乃至、随うべからず畏るべからず、之に随えば將に人をして惡道に向わしむ、之を畏れば正法を修することを妨ぐ」）等云云。此積は日蓮が身に當るのみならず、門家の明鏡也。謹て習伝て未來の資糧とせよ。此積に三障と申は煩惱障・業障・報障也。煩惱障と申は貪・瞋・痴等によりて障礙出來すべし。業障と申は妻子等によりて障礙出來すべし。報障と申は国主・父母等によりて障礙出來すべし。又四魔の中に天子魔と申も（是の如し）。今日本國に我も止觀を得たり、